

大統領奪還指令3

手負いの水機団

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面
迷惑
星

安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 カナダ沖	24
第二章 規律の問題	42
第三章 流浪の戦闘機隊	68
第四章 ビジネスマン	96
第五章 新しい命	125
第六章 アウトレンジ戦法	153
第七章 法の支配	180
第八章 しかるべき人々	206
エピローグ	217

北米大陸とアリューシャン列島





【日本】

井上茂人 海将。北米支援艦隊司令部司令官。

なかのまさみち
仲野正道 一佐。艦隊幕僚長。

喜久馬真子 二佐。艦隊情報幕僚。

村谷澄弥 一佐。空自。北米支援艦隊司令部航空幕僚。

《第4護衛隊群》

まきのしょうご 牧野章吾 海将補。第四護衛隊群司令。

わかばやしかいと
若林海斗 三佐。艦隊幕僚。元“きりさめ”副長。

《第1護衛隊群第1護衛隊》

・むらさめ型護衛艦 “いかづち” (6100 トン)

夕樹達成 二佐。艦長。

追川 涼太 三佐。副長。

●航空自衛隊

・第308飛行隊（F-35 B戦闘機）

阿木辰雄 二佐。飛行隊長。TACネーム：バットマン。

みや せ あかね
宮瀬茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コブラ

青山博之 空将。防衛装備庁・長官官房装備官。

●在シアトル日本総領事館

いちじょうさね み
一条実弥 総領事。

土門恵理子 二等書記官。土門の娘。

●ロスアンゼルス総領事館

ふじわらかね と
藤原兼人 一等書記官。

●ヒューストン総領事館

菅原聖子 一等書記官。ダラス臨時領事館領事代行。

【アメリカ】

●エネルギー省

M・A（ミライ・アヤセ） 通称・^{ソーサリー}魔術師“ヴァイオレット”。Qクリアランスの持ち主。

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。F A-18 戦闘機乗り。

●陸軍

〈第 160 特殊作戦航空連隊〉“ナイト・ストーカーズ”

ディクソン・ソプラノ 陸軍大佐。第四大隊長。

メイソン・バーデン 陸軍中佐。シェミア分遣隊隊長。

ゲーリー・アトキンス 陸軍中佐。第 4 大隊デルタ（整備）中隊長。

ベラ・ウエスト 陸軍中尉。副操縦士。新大統領令嬢。

〈第 189 歩兵旅団第 358 連隊〉

サム・クルーソー 陸軍大佐。連隊長。

・第 2 大隊（機甲）

ソフィア・R・オキーフ 陸軍少佐。大隊作戦参謀。

ロバート・サハロフ 陸軍少佐。随伴歩兵訓練教官。

メグミ・モリアーティ 陸軍特技兵。パイロット T A C ネーム：“^{バリエーション}変異体”。

・ミルバーン隊

アイザック・ミルバーン 元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデルタ・

フォースの一個中隊を率いていた。

“ムース” 狙撃手。

●海軍

・ネイビー・シールズ・チーム 7

イーライ・ハント 海軍中尉。

マシュー・ライス 軍曹。狙撃手。

●空軍

ヴァリシャ・カマラ 空軍大佐。ルイス・マッコード統合基地の米空軍上

級サービス・コンポーネント司令官。インド系。

スペンサー・キム 空軍中佐。NSA 基ってのスーパー・ハッカー。

●ワシントン州陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍予備役少佐。

マイキー・ベローチェ 陸軍予備役少佐。

●郡警察（テキサス州ノーラン郡）

ペドロ・ガルシア スウィートウォーター警察署副署長。

ヘンリー・アライ 巡査部長。陸軍に二期在籍したマークスマン。

オリバー・ハッカネン 検死医。

●レジスタンス

リリー・ジャクソン 元陸軍大尉。双発の小型プロペラ機パイパー・セミノール乗り。

●CAP

ジェシカ・R・バラード 空軍予備役大尉。

●クインシーの若者たち

タッカー・トリノ ドローン・クラブ“チェイサー”の部長。

ベッキー・スワンソン タッカーの幼なじみで、“チェイサー”の副部長。

● “ナインティ・ナイン” = “セル”

フレッド・マイヤーズ 教授。通称 “ミスター・バトラー”。

トーマス・マッケンジー 元陸軍大佐。通称“^{グラディエーター}剣闘士”トム。

アラン・ソンドイク 陸軍少佐。

レニー・ギルバート 陸軍曹長。

●アメリカ空軍士官学校

島谷利香 アメリカ空軍士官学校4年生。防大からの留学生。

●その他

カール・F・リヒター テキサス州知事。

にしやまじょういち
西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストラン
を経営。

たしろてつや
田代哲也 西山の会社員時代の後輩。

ディラン・ウエスト アメリカ大統領。元・上院軍事委員会の重鎮議員。

ヒロフミ・アヤセ 合衆国陸軍退役中將。ミライ・アヤセの父。

【イギリス】

●陸軍

アレックス・ロンド 陸軍少佐。空挺特殊部隊。コードネーム：チーター

●イギリス外務省

アーサー・シンクレア 一等書記官。

●人民解放軍海軍

賀一智 ホライチイ 海軍中將。艦隊司令官。

万通 海軍少将。参謀長。

イェンジャオリン
顔 昭林 海軍大佐。艦隊航空参謀。

ヤンシャオシエン
楊孝賢 海軍中佐。隊長。

王高遠 海軍少佐。副隊長。

張旭光 海軍大尉。小隊長。

●海軍

・ウダロイ級駆逐艦 “アドミラル・パンテレエフ” (8500 トン)

ダニイル・ウラノフ 海軍中佐。艦長。

ハビーズ・カレリン 海軍少佐。副長。

サーシャ・シュミット 海軍少佐待遇。軍属通訳。

●国連難民高等弁務官事務所

シャーロット・シンクレア 副代表。

U N I C E F
● 国連児童基金

ひいらぎめぐみ
柊木恵 UNICEFスタッフ。

大統領奪還指令3

手負いの水機団

プロローグ

テキサス州・ダラス・フォートワース国際空港は、ダラスのダウンタウンから三〇マイル北西に位置する。車で三〇分。開港は一九七四年のことだった。

それ以前に使われていたラブフィールド国際空港もダウンタウンから北西に位置するが、こちらは距離ほんの六マイル。ダウンタウンまで自転車で通勤できる近さだ。もともと、太陽が照りつける真夏のテキサス州でそうすることは、かなり危険な行為だったが。

今も格安航空会社の拠点として賑わうこの空港は、アメリカ人には、苦い歴史の一頁として記憶

されている。

一九六三年一月二二日、ジョン・F・ケネディ大統領夫妻を乗せたエア・フォースワンは、この空港に着陸し、その僅か一時間後には、ケネディは還らぬ人となった。

狙撃からおよそ二時間後、副大統領のリンドン・ジョンソンの大統領就任式が、まだ空港に駐機したままの機内で執り行われた。

華やかなピンク色のスーツを血まみれにしたジャクリン未亡人もその場に立ち会い、その日の出来事は、アメリカ国民に深いトラウマをもたらした。

この空港はまた、航空機ファンにとっては、別の不幸な出来事でも記憶されている。アメリカの女流飛行家コーネリア・フォートが目指したものの、辿り着けなかった飛行場として記憶されているのだ。

コーネリア・フォートは、大戦前に太平洋で消息を絶ったアメリカ・イアハートほど有名ではなかったが、パールハーバーで訓練生のトレーニング中、雲霞うんかの如く押し寄せる日本軍機を、最初に発見し、遭遇したアメリカ人として一躍有名になった。

その後彼女は、女性補助輸送飛行隊WAFSに入隊し、軍の輸送業務に当たっていたが、編隊を組んでラブフィールド飛行場へと向かっていた任務中、彼女にちょっとした危険な接近を繰り返していた男性飛行士の機体が接触し、墜落死した。

国連難民高等弁務官事務所副代表のシャーロット

ト・シンクレア女史は、今その空港の、二本の平行滑走路に挟まれたターミナル・ビル南端のアイバル・デッキの外にいた。空港外から見られないよう、徐々に奥へ奥へと移動していた。

彼女に付き従うのは、UNHCRのスタッフだけではなく、国連児童基金UNICEFのメンバーもいた。

夜だった。空港に灯りはなく、周囲の景色は全くわからない。外にも灯りはない。空港は工場や住宅街に囲まれていたが、人工的な灯りはどこにもなかった。時々、緊急車両のライトが遠くに見える程度だ。

一時期、避難してきたプライベート機で駐機場が溢れかえったが、奇跡的に電力が維持されたことで、ここはしばらく国外からの支援機の拠点になったはずだった。

だが、ついにダラスの電気が落ちたことで、徐々に治安が悪化し、他のアメリカ都市と変わら

ぬ状況に陥っていた。

国連機関が様々な支援活動を行っていたが、彼らも撤退を余儀なくされようとしていた。

遠くから、銃撃音が響いてくる。曳光弾は混ざっていないから、その銃撃戦は、民間人同士によるものだとシンクレアは理解した。数多の修羅場をくぐり抜けてきたので、少なくとも彼女に恐怖はなかった。

ここにいるほぼ全員がそうだった。皆、理想に燃え、この任務に就いたが、今は誰も彼もが疲れ切っている。この仕事にゴールはなかった。

立派な経歴の新人が現れる度に、貴方はほんの二年も経てば、この仕事に希望も喜びもない事実を受け入れることになる、と告げるのは辛かった。それに耐えられる人間のみがここでのキャリアを築けるのだ。

彼女のすぐ背後に付き従うUNICEFスタッフ

フの柵木恵もその一人だった。最初に入った国連機関はUNHCRだったが、今はUNICEFに身を置いている。

シンクレアは、さつき地面に転がしたボールを探そうと目を細めたが、そのゴルフボール大の信号機は、うっかり遠くまで転がってしまったように、全く発見できなかった。

ここは屋外だが、風はほとんどなく、じりじりと汗が噴き出してくる。こんな時間帯なのに、ただそこに突っ立っているだけで、頬を汗が伝わるのだ。まるでアフリカのどこかのようにだと思った。「ねえ、あの赤外線フラッシュ・ライトって、本当に点滅しているの？ 光っているかどうか全然わからないわよ？」

「赤外線ですから、肉眼では見えませんよね。もし見えたら、こういう状況下で使えない」

と柵木が言った。

「あ、でも確認する手立てはあります。私の中華スマホ、赤外線カメラ・モードがありますから。総領事館から預かったモバイル・バッテリーでまだスマホ自体も動いているし」

ダラスの停電からだいぶ日にちが経過したせいで、すでに携帯のアンテナ網もバッテリーが尽きてダウンしていた。スマホに電池が残っていたところであつた使用道はない。

「日本人は、みんな 아이폰 じゃないの？」

「わけありでして……」

「ぜひ聞きたいわ。退屈で死にそうよ。待つのは私の主義じゃない」

「UNHCR時代、最初の赴任地が南スーダンでした。その時のチーフ・スタッフは、ミスター・ゴードンです。お世話になりました」

「鉄の男、アイアン・ゴードン……。レバノンであんなことがなければ、今頃私の補佐をしてくれ

ていたのに」

「それで、ある日お茶を飲みながら、安全を巡るお話になったんです。街灯ひとつないアフリカの街や集落で、もし夜道を歩く必要に迫られた時、われわれは持っているスマホのマグライト機能を使うべきか？ それともカメラの赤外線モードで、足下を確認しながら歩くべきかと。ゴードンさんは、圧倒的に後者だと断言しました。そもそもマグライトとか、山賊に向かって、愚か者が一人で夜道を歩いていることをわざわざアピールするようなものだ。アフリカの夜で恐いのは、猛獣ではなく生身の人間だと。その後、盗撮や何やらが問題になって、西側のスマホ・カメラからは赤外線モードがなくなりましたが、私はその機能を持つ中華スマホを買っています。友人らには、そのスマホには中国政府の人民追跡チップが埋め込まれているはずだから、いざどこかの国でゲリラ

に誘拐されても、中国政府が探し出してくれると冗談を言われますが……」

柊木は、スマホのモノクロ画面をシンクレアに見せた。滑走路側一〇メートルほどの距離で、小さな光球が規則的に点滅していた。

「良かったわ。でも飛行機のエンジン音とか全く聞こえないわよね。もうしばらく時間が掛かりそうね」

だが、それから一分と待たされることはなかった。暗闇に、キーンという電気自動車のような音が聞こえてくる。だがヘッドライトの類いは見えなかった。

近くで停まると、何者かが降りてきた。そして赤いカバーが付けられたマグライトで、一瞬自分の姿と顔を照らしてみせ、敬礼した。三眼の暗視ゴーグルがFASTヘルメットの上に乗っていた。「遅くなりました！ 自分は、英国陸軍空挺兵の

アレックス・ロンド少佐であります」

「ああ。空挺特殊部隊ね？」

「単なる空挺兵であります。レディ・シャーロット・シンクレア。お兄様のシンクレア卿のお話では、貴方は、お父上のことを兄上の前では時々、あの偏屈クランキもの」と罵ることがあったが、人前でそれを言ったことはない。これは自分だけが知っている秘密だと。ところで、ケンブリッジ時代の女子寮の寮母長のお名前を覚えて頂けますか？」

「特殊部隊って、たかが身元確認でも手が込んでいるから嫌よ……。私はケンブリッジではなくオックスフォードの出身で、確かに女子寮で暮らしたことになっている。私に関するウィキペディアではね。でも実際は、私は父が借り上げたアパートからキャンパスに通っていました」

「合格です、レディ・シンクレア」

「長ったらしいから、ママにして」

「電動バギーでお迎えに来たのですが、乗れるのは四名までです。機体との間を往復しないでもありませんが、脱出は何人になりますか？」

「飛行機はどこにいるの？」

「すぐ上空です。エンジン音が地上まで聞こえない所を飛んでいます」

「A 400 M 輸送機？ あの大機がただか国連機関のスタッフを救出するために、空荷でここまで飛んできたの？」

「事情は存じませんが、たぶん支援物資の類いは搭載していないはずです。短距離短時間で離着陸するために。滑走路面上の温度を求められたので、さきほど報告しました。暑いですね……」

「こんな夜中に、華氏一〇〇度よ。街中が停電してヒート・アイランドも起こっていないのに」

「それですが、上空から赤外線で見えたところ、しっかりヒート・アイランド現象が起こっている

そうです。至る所にホット・スポットができています。モールの巨大駐車場とか。避難民がマイカーに立て籠もってエアコンを入れているせいでしょう」

「ここテキサスは、ガソリンは今も手に入るから、みんなそうするわよね。しかし絶望するわ……。まさか UNHCR や UNICEF のスタッフが、世界で最も繁栄したこの国で活動する羽目になるなんて」

「ええ。しかし配る物資が途絶えたとあつては、皆様の活動も支障を来す。輸送機を呼んでよろしいですか？」

「ちよつと時間を下さい。ほんの一分——」

「了解です。自分はその間に、本国に、皆様との合流に成功したことを報告します」

少佐がそこから離れていくと、シンクレアは、柵木に向かい合った。表情はほとんど読み取れない

かった。せいぜい互いの呼吸、あるいはため息が伝わる程度だ。

「本当に、ここに残るのね？」

「はい。まだ日本総領事館のスタッフはあちこちに残っていますから。つまり日本人も一定数ダラス市内に留まっています。ここが、日本からの救援をまだ必要としていることを本国にアピールする必要があります。私、テレビ局に顔が利きますから」

「私は、もううんざりよ……。まさか、この私が燃え尽きる日が来るなんて思わなかったわ。情けない」

「誰にも休みは必要です。それに貴方の政治力なら、ロンドンに引き揚げても仕事はできるでしょう。英国政府やEU各国が、米国への支援を再開するよう全力を尽くしてください」

「スウィートウォーターでしたっけ？ ボーイン

グ737型機の支援が入っていたのは？」

「はい。アビリーンの更に西にある小さな町ですね。風力発電の再生エネルギーの町だそうです。人口も少なく、だからいち早く電力が復旧した。せめて、アビリーンまで復旧してくれると、さらに大きな支援が得られるのですが……。空港も大きいし、空軍基地もある」

「韓国からの支援よね。ロスアンゼルス電力回復は韓国のお手柄のようだから。彼らは、あのままカリフォルニア州の治安回復に留まってくれるでしょう。少なくともここテキサスは、西海岸からの避難民流入はもう心配せずに済むわ」

突然、駐車場方向から発砲音が響いてきた。ピストルの類いではなくライフルの音だった。

ロンド少佐が駆け寄り、「伏せろ！」と周囲に怒鳴りながら、中腰になったシンクレアに覆い被さった。

「マム、撃たれるような心当たりはありますか？」と少佐が聞いた。

「そりゃまあ、この地獄から逃げ出そうなんて都合の良いことを考えていれば、妬みも買うわよね……」

「チーター」より「エランド」。敵を発見して排除せよ——」

少佐はインカムで、誰かに命じた。こちら側が見えて撃ってきているのかわからなかった。単に空港の中へと乱射しているだけかもしれない。ターミナルの中にも避難民はいた。空港職員も多数が踏み留まっていた。

彼女らには聞こえなかったが、どこかに配置された狙撃手が、敵を発見して素早く排除に成功していた。

「救出機は、恐らくこれが最後になりますが、残る皆様は、それを理解しているのですね？」

「もちろんです。みんな誇り高いプロよ。ダラスだけでも、まだ数百名のイギリス人が踏み留まっている。その救出は、私の仕事ではありません。ヒューストンの領事館の任務で、しかも彼らは、自らの意志でここに残っている。残念だわ。その輸送機、百人かそこいらは乗れるでしょうに。せめて、子供達だけでも乗せられたのに……」

「われわれが乗ってきたバギーは、軽量化のためにシートベルトはありません。乗ったら、上のフレームを両手でしっかり掴んでください。輸送機は滑走路上で停止することなく、減速するのみです。それにバギーで飛び乗ることになりますから」

「了解しました」

シンクレアは、UNHCRのロゴが入ったベストのポーチから、衛星携帯を取り出して柵木に手渡した。

「貴方は衛星携帯を持っているのよね？ ダウンタウンまで引き揚げたら、誰かに預けてくださいな。使い道があるでしょう」

「はい、そうします。お元気で！」

二人は、軽く抱き合った。真つ暗闇の中で、シンクレアを含む四人の国連機関スタッフが、四輪バギーの狭い後部座席に乗り込んだ。どこか遠くで、灯りを得るためのドラム缶が燃やされている。今夜は雲が出て星空はない。その微かな灯りだけが頼りだった。

暗視ゴーグルを眼前に下ろしたロンド少佐が、柁木ら、現地に残る数名に向かって敬礼した。バギーは、どうやら四台いたらしかった。

遠く、北西端から着陸してきた大型輸送機は、ほんの数メートル滑走しただけで止まった。走りながらではなかった。かなりの轟音を立てて止まり、四台のバギーを後部ランプ・ドアから収容

すると、また轟音を立てて滑走し始める。そして、滑走路の半分ほどの所、丁度柁木らが留まった辺りで、ふわりと空中に浮かんで急角度で上昇していったらしかった。機体は見えない。ただエンジン音でそう判断するのみだ。

シンクレア女史は、口煩い貴族だ。きっと一日中テレビに出まくり、ネットで吠え、議会や政府を焚きつけてくれるだろう。彼女のような人間は、現場ではなく後方で、その持っている政治力を遺憾なく発揮すべきだ。イギリスは、すぐにも戻ってくるだろう。

それに対して、日本、自衛隊は去ろうとしているが、自分は、まだ燃え尽きるわけにはいかない……。それが柁木の信念だった。自分がここに留まっているのは、日本人だからではなく、地球市民、国連機関の一員としてだ。

まさか、アメリカ国内で、ミルクやクッキーを

配って歩く羽目になるとは思わなかったが……。

米大統領選挙の結果を巡る裁判闘争に端を發した米国内の暴動は、内乱へと發展していた。全国各地で發生していた山火事が、大規模な停電事故を招き、全米の大都市は一瞬にしてブラックアウト、電氣のない暮らしへと突入した。

折から、全米は猛暑に見舞われており、電氣、ガスと次々とライフラインが止まり、人々は、まだ電氣が生きていて、エアコンが動いている州を指して避難し始めた。だがその避難先も、たちまちパンクし、全米に安全な都市、安全な州は一つもなかった。

そうした中で、基地内待機を命じられた米軍の中でも対立が表面化し、正規軍同士の激しい戦闘がすでに發生していた。

西海岸では、アラスカ奪還を公然と表明した口

シアが中国と組んですでに行動を起こしていた。その防戦は、ほぼ自衛隊のみで行われた。それでもアメリカ軍は動かなかった。解放軍兵士が、基地内に侵入してきても、出動を禁じられた。

正規軍部隊同士の衝突は、支援に当たっていた同盟国にも衝撃をもたらした。ここに至り、NATO各国は、大西洋を越えて行っていた、軍事行動を含むアメリカへの支援の中断を發表し、西海岸から治安回復と援助を続けていたアジア各国も難しい立場に立たされた。自衛隊は、まだシアトルに踏み留まって戦ってはいたが、犠牲者は増えるばかりで、撤退は規定路線だった。

逆に韓国は、ロスアンゼルス電力復旧に、それなりの人員とリソースを提供し、ダウンタウンの一部の電力回復に成功していた。

この大混乱が始まってから、すでに一四日間が経過しようとしていた。アメリカ国民の七割八割

が、すでに二週間、電気も水道も、エアコンもな
い暮らしに耐えていた。

第一章 カナダ沖

海上自衛隊北米支援艦隊は、カナダはブリティッシュ・コロンビア州沖にいた。アラスカはアンカレッジまで凡そ七〇〇キロ、アメリカ西端ワシントン州シアトルからは一五〇〇キロ以上も離れている。

この二週間、海上自衛隊は、この混乱につけ込み、アメリカの分断を煽ろうとする人民解放軍と対峙してきた。中国海軍はすでに数隻の軍艦を失っていたが、海自側も、ヘリ空母を守ろうとした護衛艦が中国海軍のフリゲイトと衝突して一隻沈没し、二〇名近い死者行方不明者を出していた。

海自にとっては大きな犠牲だった。中国側の方

が犠牲は大きかったが、彼らは目的の多くを達成していた。陸兵を、シアトルに近いルイス・マツコード統合基地に降下させた時、アメリカ軍は出動を禁じられて動けなかった。

その時の諸々のわだかまりや鬱憤が爆発し、ルイス陸軍基地から部隊が丸ごと離反する結果となった。

対する海上自衛隊艦隊は、険しい鏖迫り合いが一段落すると、シアトルにある軍用ドックに交替で艦艇を入渠させ、簡単な補修を受けることができた。わざわざ、日本から造船会社のエンジンアを呼ぶこともできた。

乗組員が上陸して休暇を過ごすような余裕はなかったが、武器弾薬の補給も受けられ、最後の戦闘から、しばしの休息を得ることはできた。少なくとも、睡眠は取れた。

三隻の正規空母と三隻の大型揚陸艦を含む中国艦隊は、今、彼らとアンカレッジの丁度中間地点、アラスカ湾上にあった。

カナダ沖に日没が迫っていた。太陽はまだ僅かに、西の水平線上にあるが、ほんの一〇分もしないうちに没するだろう。

「北米支援艦隊」司令官の井上茂人海将は、第四護衛隊群ヘリコプター搭載護衛艦DDH-184「かが」(二六〇〇トン)の艦上にいた。「かが」が旗艦だった。中国海軍は、何度となく、「かが」への攻撃を仕掛けてきたが、奇跡的に撃退していた。

井上は、艦橋構造物横の飛行甲板に出て、北の

水平線を見ていた。真夏とはいえ、この緯度まで上がると、海風はそれなりに冷たかった。

水平線に見えるのは、ほんの三隻の軍艦だった。二隻は味方の護衛艦。うち一隻はイージス艦。そして水平線上ぎりぎりに見えるのは、こちらを監視している中国海軍のフリゲイト艦だ。

通常、作戦行動中の味方艦隊が互いの艦を視認する距離内に接近することは滅多にない。何かの広報用の写真を撮る時のみだ。守るべき艦を囲んで、その外へ外へと膨らんでいく。艦隊が布陣する半径は数百キロに及ぶ。

その更に外周を、ヘリ空母から上げた戦闘機で守るのだ。だが、つい六日前は、日本艦隊は中国海軍艦隊と錯綜し、危険な鏖迫り合いを繰り広げることを強いられた。

中国海軍は、武器を使つての攻撃は、自分たちにも犠牲が大きいことを悟り、軍艦そのものをぶ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。